

島蘭進「神道と国家神道・試論

— 成立への問いと歴史的展望 — を読む

新 田 均

ここで取り上げる「神道と国家神道・試論」成立への問いと歴史的展望」(『明治聖徳記念学会紀要』復刊第四十三号、平成十八年十一月。以下この論文からの引用は頁数のみを記す)は、近代神道を的確に理解するには、広義の国家神道概念を鍛え直して用いることが必要であると主張してこられた島蘭進氏が、その議論をさらに進めて、「広義の国家神道の諸要素をひとまとまりに「国家神道」とよぶ方が日本宗教史の、また神道史の現実にも迫る上で適切である」(一一〇頁)と、日本宗教史や神道史全体を見通す上でも、広義の国家神道概念の使用が有効であることを証明しようとした論文である。この論文からは、重箱の隅につくような史料読解に血道をあげている研究者

や、決定的な証拠もない世界で不確かな推論のやり取りに固執している学者には期待できない視野の広さ、問題意識の大きさ、志の高さが感じられて、少し妙な表現かもしれないが「爽やかな刺激」を受けた。

ただし、この論文の核心である「神道」の成立時期についての諸学説を検討して、広義の国家神道概念の有効性を証明する」という部分については、その意図に反して、むしろ論理的矛盾を露呈してしまっているのではないか、と思えた。そこで、以下に、その理由を記したいと思う。

まず、島蘭氏は、「神道」の成立を縄文時代や弥生時代に想定する安蘇谷正彦氏や堀一郎氏の説を取り上げ、「日本文化と神道を切り離せないものと見るこのような見方では、神道の範囲は限りなく広がってしまつて收拾がつかなくなる」(一一五頁)として、それを退ける。

しかし、他方で、「神道」は中世後期に成立したとする黒田俊雄氏の説も次のような理由から退けている。

「黒田が『宗教としての自律性』とか『宗教としての体系』というとき、宗教とは教義や教団組織をもち、信仰者が構成する宗教集団に支えられるはずのものであると理解されている。プロテスタント的な宗教観や近代法制度的な『宗教』概念に近づいている。そのため狭い『宗教』概念に立脚することになり、『神道』の定義も狭くならざるをえないのだ。」(一一六—一一七頁)

「黒田のようにあまり狭く限定してしまうと、今度は『神道』の通常の用語法で指示されている多くの事柄が神道ではないことになってしまう。」(一一七頁)

「私の理解するところでは、教義をもつもののみを『宗教』とよぶというのは今ではきわめて特殊な用法である。」(一一七頁) こう批判した後で、島蘭氏は、「神道」は天武持統朝期に成立したとする説を「より穏当な説」(一一七頁)と評し、「私は

七世紀末に土着宗教的な宗教と区別される神道のシステムが成立したと見てよいと考える。」(一二一頁)と述べている。この「土着宗教的な宗教」と、それとは区別される「神道のシステム」の成立を、島蘭氏は「前神道から神道の形成へ」(一二二頁)とも言い換えている。

それでは、この「前神道」から「神道」への転換のメルクマールとは何だったのか。それは「国家祭祀」のシステムを組み立てることであったと、島蘭氏は言う。

「国家の中心には天皇の神的權威を支える祭祀体系がなくてはならず、またそれを裏打ちするような天照皇太神を頂点とする神社や神々に関わる神話がなくてはならない。もし、これが『神道』の形成の重要な転機を画するのだとすれば、このような国家や政治についての概念そのものが『神道』の重要な構成要素だということになる。」(一二二頁。傍線引用者)

さらに、島蘭氏は、この時に成立した「神道」が、近代の「原型」「源泉」とでも言うべきものだったとして、次のように書いている。

「明治維新政府は古代の『祭政一致』の制度への復帰を目指したのであり、古代とは大いに形態を異にするとはいえ、天皇を中心とする国家祭祀の体系を形成することに大きな力を注いだ。

そしてそれが広義の用法で国家神道とよばれてきたものである。だとすれば、七世紀末に朝廷周辺で成立した国家祭祀の体系や神話文書は、明治以降、全国民を巻き込んで形成されていく近代国家神道に先立つ、「古代国家神道」を特徴づけるものと見なすこともできよう。」(一二二頁)

こうして、島蘭氏は、七世紀末に成立した「神道」を、さらに「古代国家神道」と言い替え、「このことは広義の国家神道という概念の妥当性を支持する有力な根拠の一つになる」(一二二頁)と主張する。何故なら、「近代の国家神道の原型はすでに古代において成立しており、そこでは村上「重良」が近代の国家神道の諸要素と見なしたものの「神社神道、皇室神道、国体の教義」の原型もすでに成立していたと見られるからである。」(一二二頁)というのである。

さて、この説明は、本当に、島蘭氏の提唱する広義の国家神道概念の使用の有用性を証明しているであろうか。私には、むしろ反対に見える。

島蘭氏が、他の論者のように、「前神道的なものにこそ神道の本質がある」(一二五頁)と考えたり、「地域社会に基盤をもつ神道」(一二六頁)こそ「神道」であると主張したり、「古代の神祇信仰をそのまま神道」(一二六頁)と見なして、七世紀

末の転換は、「神道」(あるいは「古神道」「原始神道」)から「国家神道」への転換であったとしているのなら矛盾はない。

ところが、島蘭氏は「国家や政治についての概念そのものが「神道」の重要な構成要素だ」ったとして、この転換を「前神道から神道の形成へ」と捉えているのである。「天皇の神的權威を支える祭祀体系」や「天照皇太神を頂点とする神社や神々に関わる神話」という「国家や政治についての構成要素」を内部に含んではじめて成立するのが「神道」だとすれば、その同一の対象を指すのに、「国家」という修飾語を付加して言い換えるのは、島蘭説にとって、無意味というよりも、むしろ有害であろう。

なぜなら、「国家的」という新たな性格をもって七世紀末に成立したものを「国家神道」と言うとするれば、それ以前には「国家的」でない「神道」がすでに成立していたとしなければならぬからである。しかし、島蘭氏は、七世紀末以前については「前神道」と呼び、それを「神道」と認めようとはしていない。

逆に「神道」の中にはすでに「国家的」な要素が含まれており、しかもそれが「神道」の「成立」にとって不可欠な要素であるのなら、その要素を非本質的なものと見なしたり、本質の変化と考えて付加されてきた「国家」という修飾語を「神道」

に外付けするべきではあるまい。

七世紀末に「神道」から「国家神道」への転換を見るのではなく、「前神道」から「神道」への転換を見るとすれば、そして、そこに近代神道の原型を見出そうするのであれば、島蘭氏の見解は、「広義の国家神道」の使用ではなくして、むしろ、それを放棄して、これまで「国家神道」の名で呼ばれてきたものを、国民国家形成の過程における原理・作用・運動として位置づけなおし、「できる限り社会のあちこちにある歴史的な要素を包み込んでいく原理、包み込んでやまない原理、もしくはそうした歴史的な作用を「神道」と呼ぶべきであろう」(『明治維新と宗教』筑摩書房、平成六年、四一―頁)と主張し、いわば「広義の神道」概念の使用を提唱した羽賀祥二氏の見解に近づかざるをえないのではあるまいか。

(につ た ひ と し ・ 皇 學 館 大 学 教 授)